

二〇一八年度

入学試験問題

Ⅱ 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は23ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例：

--

)がある場合は、句読点などそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の a・b・c は漢詩 A の訳詩である。a・b・c の説明として最も適するものを後の 1～5 の中からそれぞれ選び、その番号を答えなさい。

なお、読みやすさを考慮し、作品の一部を改変しています。

A 宿昔青雲志 宿昔青雲の志

蹉跎白髮年 蹉跎たり白髮の年

誰知明鏡裏 誰か知らん明鏡の裏

形影自相憐 形影自ら相憐れまんとは

a 青雲に思いはかけつ

白髮のあしもよろよろ

ただ一人鏡に向い

憐み合う影と形と

b シユツセシヨウト思ウテイタニ

ドウコウスル間ニトシバカリヨル

ヒトリカガミニウチヨリミレバ

皴ノヨッタヲアワレムバカリ

c あまがける ころろ は いづく しらかみ の みだるる すがた われ と あい みる

- 1 元の漢詩が表現する老いの悲しみを和語と漢語をおりませた独特のリズムを用いて散文的に訳し、読者の感興を高めているが、補足的な説明が多いため読解が固定化されてしまう側面がある。
- 2 わかりやすい和語に元の漢詩を置き換え、一定のリズムに則って訳されている。また字句はそのままに読みを変えることによって詩の表現する悲哀の感情を柔らかい音韻に包み込んでいる。
- 3 一切の技巧を凝らさずに元になった漢詩を直訳したもので詩の感興には乏しいようにも感じられるが、古語を使用せず、口語体を用いることで現代の我々にもわかりやすい訳詩となっている。
- 4 日本の伝統的な定型詩の形式を用い、元の漢詩の内容を取捨選択し訳している。なかでも漢詩の強い心情表現を、あえて訳詩では表記せずに読者の想像に任せている点などが特徴的である。
- 5 一定の韻律にのせて、小唄や民謡のようなおどけた調子で元の漢詩の内容を大胆に意識している。だが、この陽気で明るい調子が逆に詩の伝えようとしている哀しさや切なさを強調している。

【二】 次の文は香川景樹の著した『百首異見』の一節で、百人一首にある二条院讃岐の歌、「我が袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなし」について述べたものです。作者はこの歌の「沖の石」という歌語に注目し、調査・考察した上で一つの考えを提示しています。読んで、後の問いに答えなさい。

若狭国遠敷郡矢代浦より七八町ばかり沖なる海底に大石あり。昔より沖の石と言ひて、尤も舟人の舟腹をかかれん事をおそれ漕ぎ避くるわたりなり

と言ふ。今も土人沖の石と常に呼びなれたり。さて、かの矢代浦は、永曆のころ、源三位頼政禁庭にて怪獣を射たる賞に賜はりし食邑なりと言ひ伝ふ。

猶、はやくより、同郡なる松永東郷及び宮川保を領せられて、その旧址今に遺れりと言へり。さるは平家物語に、この卿若狭の東宮川を知行せられたる

事見えたれば、疑ふべきにあらず。矢代浦の旧号を稲富浦とよびて、始めは宮川保に属せりとも言へり。さてこの作者は、かの卿の女なれば、「寄石

恋」の題に思ひ寄せて、まのあたり見なれ聞きなれたる様を言へるならん。かつ世にもしるき事ならんには、もとめても詠み出づべくや。顕仲卿の近江

なる沖の白石を詠まれ、名寄に因幡なる神の御子石を詠めるなど、同趣なるべし。

(本文には改変した部分があります。)

※1 若狭国遠敷郡矢代浦：現在の福井県小浜市にある。

※2 七八町：「二町」は約一〇九メートル。

※3 源三位頼政：源頼政。平安時代末期の武将・公卿・歌人。

※4 怪獣を射たる賞：『平家物語』に、頼政が鶴(ぬえ)を退治したという説話がある。

※5 この卿：源頼政のこと。

※6 「寄石恋」の題：「石に寄する恋」。歌題。「我が袖は」の和歌は、『千載集』に「寄石恋といへる心を」という詞書で載っている。

※7 顕仲卿の近江なる沖の白石を詠まれ：源顕仲の永久百首の「石」題の歌、「浪立ててかるとばかりは聞こゆれどかへるも見えず沖の白石」を指すか。

※8 名寄に因幡なる神の御子石を詠める：中世の歌学書『歌枕名寄』にある、因幡国歌の「神御子石」の歌、「因幡なる神のみこ石あるじあらば過ぎ行く秋のみちしるるべせ

よ」を指す。

問一 —— 1 「今も土人沖の石と常に呼びなれたり」とあるが、この「沖の石」に関する説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 矢代浦の沖の海面に頭を出してそびえ立っており、船を傷つけたくない舟人たちはそこを避けて航行している。
- 2 矢代浦の沖の海底にあるため、昔はその全貌を知られていなかったが、近年その大きさが判明したものである。
- 3 矢代浦の沖に見える大きな石で、その威容に昔から人々は恐れを抱いており、決して近づかないようにしている。
- 4 矢代浦の沖の海底に沈む大きな石で、航行中の船を傷つけたことがあり、海上から分かるよう目印が置かれている。
- 5 矢代浦の沖の海底にあって見えないが、うっかりその辺りを通ると船腹に傷がつくほどの大石として知られている。

問二 —— 2 「かの矢代浦」とはどういう地だと言うのか。その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 矢代浦は「沖の石」と呼ばれる大石があった地であり、源頼政が治めた地である。
- 2 矢代浦は、源頼政が領有したいと望んで、見事に怪獣を退治し手に入れた地である。
- 3 矢代浦は、源頼政が褒賞として賜った地で、その記念として沖に大石が運ばれた地である。
- 4 矢代浦は、源頼政が同じ郡の別の別の地域を治めていたことから、その所領と誤解されている。
- 5 矢代浦は、疑わしい点も多いが、源頼政の領地だったと言えられ、遺跡も残されている。

問三 二条院讚岐の歌の「沖の石」について作者が提示した説として適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 源頼政の娘として、その父の領地を代表する景勝を宣伝しようと、歌に詠みこんだのだろう。
- 2 「寄石恋」の題での新奇さを狙い、あまり知られていない珍しい石を探し出して詠んだのだろう。
- 3 父の領地にあつて、讚岐自身が見聞きして知っていた「沖の石」を歌に詠みこんだのだろう。
- 4 「寄石恋」の題が出た時に、父から話に聞いていた「沖の石」に思いを馳せて詠んだのだろう。
- 5 源頼政には、その領地にある「沖の石」を詠んだ歌があり、讚岐はそれを引用したのだろう。
- 6 「寄石恋」の題で詠むとき、広く世に知られた大石である「沖の石」を取り上げて詠んだのだろう。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

戦国時代の中国（地図後掲）では多くの国々が対立や和睦を繰り返していた。楽毅はその中の弱国である中山の宰相（王の補佐役）の息子である。彼の少年時代に中山が強国である斉と国交を断絶して以来、斉は中山を蔑視し、中山は斉を憎悪するようになっていた。そんなある日、中山は強国趙の軍隊に国土を縦断されるといふ屈辱を味わうが、自国の力を過信する王やその近臣たちはこのことをそれほど重視せず、外交による解決を図ろうともしていなかった。このことに危機感を抱いた宰相は、他国に援けを求めるよう王に諫言するも退けられる。その時、太子（王の継ぎ。嫡男）が強国である魏と斉とに援けを求めるべきだと説いたため、父である王は激怒するものの、結局は太子自らが使者となって魏に赴くように命令した。本文はこれに続く場面である。

帰宅した楽毅の父は、すぐさま楽毅をよび、

「藪をつついたら蛇がでた」

と、いい、太子が魏へむかう使者となつたいきさつを話した。

「王にはご愛妾がごいますか」

と、楽毅はしずまった目を父にむけた。

「するどいな」

父は苦笑した。じつはおなじことを考えて退廷してきたのである。中山王には寵妾がいる。その寵妾は子を産み、その子はすでに十歳をすぎている。

——できることなら。

と、中山王は考えはじめたのではないか。自分が愛している妾の子を太子にしたい。だが廃嫡はたやすくできることではない。おこなえば朝廷にかならず波風が立つ。家臣のまとまりがこわれる。しかし、

——太子が死ねばどうであろう。

なんの問題も生じない、と中山王はあるとき瞋怒しつつ胸の底では冷静な想念をめぐらしていたのではあるまいか。

「太子は英主になれる素質は充分にある。殞命などということがあつてはならぬ」

「はこ」

「太子が往途か帰途かでお斃れになれば、わが中山は趙に滅ぼされるまでもなく、自滅する」
「父上——」

楽毅の目に冷静さを破ってくるものがある。

「太子はそういうかただ。わかったか」

「よくよく肝に銘じました」

「そこで、毅よ」

「わかっております。太子をお衛りして、魏へゆくのでございましょう」

楽毅はのみこみがはよい。

「そういうことだ。多数でゆけば趙兵の目につきやすい。少数で潜行することを具申し、王のお聴しを¹いただいてある」

「即断をたまわったのですか」

「ふむ……」

べつの想念にあたったという口もとのあいまいさになった。

「父上、外の敵より内の敵のほうが恐ろしいのです。王の近くにおられるどなたかの息がかかれば、賊が生じ、その賊が太子を襲うということがあるやもしれません」

「なんじのいう通りである」

太子の生母は齊の公女であった。その生母はすでに病歿しているが、齊の公室の血がはいっている太子に、一滴の愛情もそそいでいないというのが中山王の現状である。

「太子が帰還なさるころ、国境への目くばりを、おねがいたします」
往きよりも復りのほうが危険が多いと楽毅は考えている。

「わかった。わしもぬからぬようにいたそう」

父は家臣のなから屈強の者をえらび楽毅に属けた。むろんそのなかには丹冬がいる。

「よいか。趙にはいったら、われらは魏の王室へ玉器をおさめる工人になります。こころえておくように」
と、楽毅は数名の従者たちにいった。楽毅は父の口を通して太子に、

「ご礼服は荷にかくし、微服なされ、従者の数は十人をでぬように」と、願ってある。

楽毅は太子の知能も性情もよく知らない。太子はながく燕えんにいたし、太子が帰国すれば、楽毅が斉へゆくというように、顔さえしつかりあわせたことがない。

いくら父が、

「太子は I である」

と、いつても、気性が適あう適あわなないというのはべつなところにある。おなじような懸念は太子ももっているであろう。

楽毅は靈寿れいじゆを出発する前日に太子に面謁めんえつした。

——なるほど、すぐれておられる。

と、感じたのは、楽毅の到着を俟まって、太子が門前に出迎えていることを知ったからである。よほどの賓客ひんきやくを迎えるのならそうするであろうが、ただ陪臣はいしんとってよい者をそれほど鄭重ていじゆうさで迎える太子のことをきいたことがない。

楽毅は恐縮をあらわし、門内で進路を太子にゆずった。が、太子は、

「このたびの旅を戦いにたとえれば、わしが将であり、なんじが軍師である。この将はたよらないゆえ、軍師に万事を任せるつもりよ」

と、いい、楽毅に路みちをゆずった。

たがいにゆずりあつて路を進み、堂にのぼった。

——これこそ礼だ。

と、楽毅は感動した。

²中山の未来を暗く描きつつあったかれの心の筆がとまり、にわかにもるい色彩をえらんだ。この人がつぎの君主か、とおもえば、愁眉しゅうびが開いてゆく。「なんじは三年間趙で学問をしていたそうな」

と、太子はやわらかく切りだした。

楽毅は即答をせず、堂上にいる太子の近臣をみた。どの臣も太子に信用されているようであるが、自分の発言が外へ漏れると、父3をはじめとして迷惑をおぼえる人がいる。太子には真実を語げたくても、臣下がいる席での発言は慎重を要する。

「趙ではない、と申し上げておきます」

黙っていればすむことかもしれないが、太子に好意をいただきはじめた楽毅は、自分の誠意をあらわすためにそういった。「趙ではない……、では……」

問いのするどさを楽毅にむけようとした太子は、ふとおもいあつたように、ことばをのみこみ、左右をむいて、「軍師どのと密謀みつぼうがある。そのほうどもはさがつていよ」

と、いい、あえて笑声を放った。

その笑声のおわらぬうちに、楽毅も丹冬たちに目くばせをして退かせた。

堂上に余人の影がなくなったことをたしかめた太子は、

「斉におられたか」

と、驚嘆をこめていった。

「ご推察の通りです。三年間、臨淄りんしに住み、孫子の兵法を学んでまいりました」

「ほほう、それはうらやましい。わしの体内にも斉の血が流れている」

「存じております」

「臨淄のにぎわいのすさまじさは母から聞いた。人ごみを歩けば、朝つくった衣服も、夕にはすりきれぬそう。まことか」

「なかば、まことです。車の轂くわがぶつかり、人の肩がすれるのは、しばしばです。路上ではあちこちで鬪とう鶏けいがおこなわれ、なまける者は大いになまけ、学ぶ者は大いに学んでおります」

「はは、ますますもつてうらやむべき都よ」

太子のあこがれの地のなかに、当然、臨淄はあつたであろう。が、そのあこがれとは逆に寒々しい国である燕へやられた。

——斉へゆき、臨淄をみたい。

太子のなかの血があこがれに色濃く染まったことはある。だが、太子のなかの血の半分は中山の色をもっている。その色は斉を嫌忌けんきする蒙くわさをもっている。

中山の君臣がその蒙さのなかでいすわっているかぎり、太子は心のなかでみえるはずの斉や臨淄の風景をしりぞけ、明るい窓をとじていた。それが太子としてとるべき心のかまえであった。

——しかし、この男は、敵国に三年も留学していた。

それをゆるした楽毅の父をまずほめるべきか。太子はそうおもいつつ、

「孫子の兵法とは、わしにはわからぬものであるが、孫子は馬陵ばりやうの戦いで魏軍を大敗させた孫臏そんぴんのことか」と、きいた。

「孫子は衛えいの宰相をつとめた孫氏から発しているといわれ、その子孫に呉の將軍となった孫武そんぶがおり、その末裔まつえいに孫臏そんぴんがおります。そのふたりの天才戦術家をあわせて孫子といい、孫臏の子孫と弟子たちが齊では大きな兵家へいかをなしております」

「さようか。こまかなことは訊きかぬ。孫子の兵法の極意きくぎはいかなるものか」

太子はさりげなく楽毅の知略のありかたをさぐった。

「無形と無声でありましょう」

楽毅の声にりきみはない。太子は大きく目をひらいた。

「形がなく、声もない。それが兵法か。では、法を学ぶ意味がない」

「戦いにおける法は、国家の法とはちがいがい、つねということがありません。千4

ア

 万

イ

 いたします。それをきわめてゆけば、無形と無声に至るのです」

「ほほう、孫子の兵法とはそれほど奥深いものだとは知らなかった。兵法といえば、兵の進退のしかた、陣の立てかたなどをおしえるだけのものだとおもっていた」

太子は楽毅より十歳ほど上であるが、そういう年齢の差を意識させず、むろん自分が国王のつぎに貴い身であるという尊大さもみせず、話をつづけた。

この話のあいだに、ふたりは魅了5しあったといつてよい。

それだけふたりは中山のゆくすえを憂慮しているともいえる。

さいごに太子は楽毅が薛公せつこうに面会したことを知り、

「ああ、わが国で、真の勇氣をもっているのは、なんじだけである」
と、手bばなしで楽毅をほめた。

——この男がつぎの宰相になる。

太子はそうおもい、自分の前途に光が射さしたような気がした。楽毅もにたような希望をおぼえたが、ひとつ太子とちがうことは、自分の希望にとらわ

れまいとしたことである。

——支配者は変容する。

同門の田氏とくりかえし楚その平王へいおうについて論じたことはそれであった。楽毅はたしかに中山の希望として太子をみた。が、その希望を過信すると欲が生ずる。その欲が太子の欲と適あえばよいが、ずれると、怨うらみが生ずる。つまり明るい想像は、その想像に固執すると、暗い妄想もうそうに変わりかねない。

——薛公をみよ。

薛公に会って以来、つねに自分にいいきかせていることは、
II、ということである。薛公は斉の宰相であった靖郭君せいかくくんの子として生まれながら、その莫大ばくだいな家産にみむきもせず、諸国漫遊の旅にでたととき。それはいつさいの所有を放棄した者の姿である。無欲を銜くう者は名誉欲にとらわれるという坎筭かんさんにはまりこむものであるが、薛公にはそれもない。

——自分もそうありたい。

名誉にも不名誉にも逃げない、性情のままの自分でありたい。

楽毅はそんなおもいで太子をながめ、自分をみつめた。

(宮城谷 昌光『楽毅』より 改変した部分があります。)

※1 ご愛妾…妾とは正妻以外の妻のこと。

※2 殞命…命を落とすこと。落命。

※3 靈寿…中山の首都。

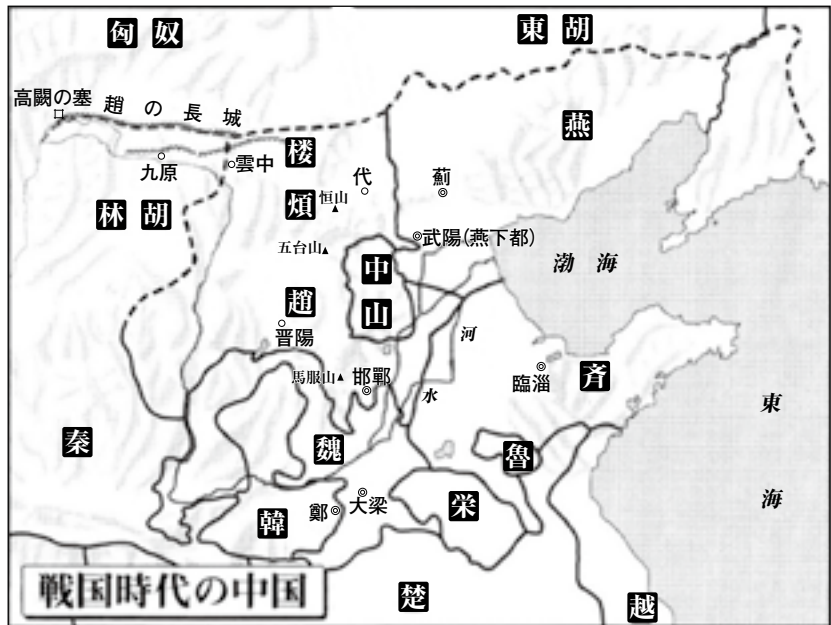
※4 陪臣…家来の家来のこと。又家来。

※5 臨淄…斉の首都。

※6 轂…車輪の一部。

※7 薛公…当時、斉の名宰相として有名であった。

※8 坎筭…小さな井戸の中から世間を見るような狭い知識のこと。



(新潮文庫『楽毅』に掲載されたものを一部改変している)

問一 Ⅱ a 「極意」・b 「手ばなしで」・c 「銜う」の本文中における意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

a 「極意」

1 真実の心 2 物事の核心 3 端的なまとめ 4 最上の味わい 5 これ以上ない思い

b 「手ばなしで」

1 大きさに 2 やつと 3 表向きは 4 遠慮せずに 5 それとなく

c 「銜う」

1 なりきる 2 みならう 3 ひけらかす 4 たわむれる 5 もったいぶる

問二 Ⅰ「王のお聴しをいただいている」とあるが、王はなぜ「聴」したと楽毅たちは考えているか。そのことを説明した以下の文の [] を五十字以内で埋めなさい。

王は [] と考えたから聴した、と楽毅たちは考えている。

問三 Ⅰ [] に入れるのに最も適する言葉を次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 大禍 2 大器 3 大将 4 大身 5 大成

問四 ——— 2 「中山のくえらんだ」とあるが、このことを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自国の危機を直視することなく私心に基づいて行動する王の様子から、楽毅は中山の衰退を思い描いていた。しかし、礼を重んじて謙虚にふるまっている太子に接し、太子が王になれば中山は発展するのではないかと考えるようになった。
- 2 自国の力を冷静に量れず甘い期待を持ち続ける王の様子から、楽毅は中山の滅亡を予想していた。しかし、自国の危機を救うためなら身分の低い自分でさえも軍師に取り立てる太子の必死さを見て、太子のために懸命に働こうと考えるようになった。
- 3 太子を己の一存で決められると考えるほど太子という地位を軽んじる王の傲慢な様子から、楽毅は中山は趙に滅ぼされるべきだと考えていた。しかし謙譲の美德を備えた太子に会い、この太子が王になるならば中山の危機を救うために働こうと考えている。
- 4 斉への憎悪に凝り固まっているために斉と国交を回復しようとしないう王の様子から、楽毅は中山の衰退を予想していた。しかし、人の実力を冷静に評価できる太子の賢明さにふれ、太子が王になれば斉との国交は回復し中山は発展できるだろうと考えている。
- 5 自国の威厳にこだわって他国に頭を下げようとしないう王の様子から、楽毅は趙に滅ぼされる中山の有様を思い描いていた。しかし、陪臣の自分にさえも礼節を尽くす太子と交わり、中山がこのような礼節を取り戻せば趙は侵略をあきらめるのではないかと考えている。

問五 ——— 3 「父をはじめとして迷惑をおぼえる人がいる」とあるが、ここでいう「迷惑」の内容を考えたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 太子が信頼しているのは楽毅だけだと嫉妬される。
- 2 敵国に通じているのではないかと疑念を抱かれる。
- 3 孫子の兵法は役に立たないだろうという偏見を持たれる。
- 4 留学の成果として中山を発展させるだろうと過度に期待される。
- 5 太子をけしかけて王を殺害しようとしているのではと警戒される。

問六 ——— 4 が四字熟語になるように、ア・イ に当てはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

問七 —— 5「ふたりは魅了しあった」とあるが、「ふたり」はどのように「魅了しあっ」ているのか。このことを説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 太子は、知勇兼備の楽毅に対して将来自分の宰相となる者として期待しており、楽毅は、謙虚で賢い太子に対して将来の王としての資質を認められている。

2 太子と楽毅は、中山王やその近臣たちに対する思いに基づいてそれぞれの意見をぶつけあうことで、お互いの気性が合うことを確認することが出来ている。

3 太子と楽毅は、中山のゆくすえを憂慮する気持ちをお互いに語り合うことで、将来自分たちが中山を治める際は現在のような不満を抱くことはないだろうと考えている。

4 太子は、興味があれば敵国の宰相にも面会する楽毅の純粹さに感動しており、楽毅は、身分の低い人間に対しても率直に自分の思いを語るこゝとが出来る太子を好ましく思っている。

5 太子は、自分のあこがれの地である臨淄で孫子の兵法を修めた楽毅に対して羨ましさを感じており、楽毅は、年齢や身分の差を自分に感じさせない太子に対して親しみを感じている。

問八 II に入れるのに最も適する言葉を次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 支配者の欲も尊重せよ

2 おのれの希望を大切にせよ

3 支配者に最終的には期待せよ

4 おのれへのこだわりを棄てよ

5 おのれから支配者に働きかけよ

問九 本文の後半部に関して、A～Eの五名が意見を述べています。五名の意見を読んで、後の問に答えなさい。

【五名の意見】

Aさん 中山が危機を迎えている中、斉との関わりをもつ太子と楽毅とがお互いに魅了しあい、共に中山の希望として相手を見えています。これから
の二人は、君臣の関係でありながら、一心同体となつて中山を立て直していくのだろうと思いました。

Bさん 確かに太子と楽毅とは、互いに中山の希望として相手を見えています。ただし、楽毅は、太子を含めて **ア** ものだから、今自分が太子に
対してもっている希望に固執すると悪い結果が生じうると考えています。従つて、太子と楽毅との関係は魅了しあつてはいても、ずっと一
心同体のままでいくとは限らない、と思います。

Cさん Bさんの意見に付け加えると、本文の最後で、楽毅は自分の理想をもちながら太子や自分自身を見えています。これまでの楽毅の考えや態度
から、楽毅は中山を立て直そうという点で太子と同調しているものであつて、単に好意を抱いているからむやみに同調しているのではないと
言えます。この楽毅の態度は「**イ** ⁶ **イ** して **ウ** ぜず」という言葉で表現出来ると思います。

Dさん Cさんが触れた理想についてですが、楽毅の「名誉にも不名誉にも逃げない、性情のままの自分でありたい」という理想は、名誉であると
か不名誉であるとかいった、他者の評価に左右されて生きることを否定し、自らの心に従つて生きることを肯定する考えだと思ひます。そ
して、そのような考えを具現化した薛公のようにありたい、と楽毅は考えているのでしょうか。

Eさん 皆さんの意見をまとめると次のようになるでしょうか。「魅了しあつた太子と楽毅はお互いを中山の希望として捉え、中山を立て直そうと
いう思いを一つにしている。と同時に、楽毅は、太子への希望に固執したり他者の評価に左右されたりすることを否定的に捉え、薛公のよ
うに精神的に **エ** な人間であることを望んでいる」と。

【問】

i **ア** に入れるのに最も適する言葉を本文中から八字で抜き出して答えなさい。

ii **イ** が慣用句になるように、**ウ** に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

iii **エ** に入れるのに最も適する言葉を次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 健全
- 2 公正
- 3 自由
- 4 柔軟
- 5 大胆

問題は次のページにつづきます。

【四】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

信州八ヶ岳の西麓、標高千百メートルぐらいのところに、大きな泉がある。八ヶ岳は東麓も西麓も、水の少ない山であるが、ここの湧水の量は豊かで、水田の灌漑用水の役を果した末は釜無川にそそいでいる。また麓の村はこの水を引いて水道にしている。水の質もよい。

この泉のある一帯は背に小さい丘を負い老樹が高くそびえている。杉、赤松、檜、そして榎、この榎の木は見事である。素姓よくまっすぐに伸びて、椈の葉に似てそれよりは柔かい葉を茂らしている。地面はかげつて、やわらかくうるおい、苔の中にとりかぶとが群生している。

昨日、私はそこへ行った。杉や榎の黒ずんだ葉の中に、櫟の若葉が美しかった。以前はここはもつと深い森であったろう。湧水の溜りには、すすいと俗に言われる水中の虫が、その名に違わず、すすいと軽快に動く影を美しい水の底に写していた。人は誰もいなかった。私はその水の辺に腰をおろした。

湧水の周囲の十畳ほどの広さを、ここに立入るべからずとして囲ってある。ジュラルミンの柱を立て、その柱に、例のトゲのある針金をこちたくからませている。ジュラルミンは人工的な銀色である。柱の土台はセメントで固めてある。

いまは季節に外れていて、人っ子一人いなかったが、夏のシーズンにはここを訪れるハイカーたちが多いらしいことは、そここにちらばっているジュースの空罐や、水溜りの底に沈んでいるガラス壘によっても知られる。ところどころに焚火の跡もある。榎の幹がけずられ、そこに書かれた稚い文字が色褪せながらに見える。

ここに来るハイカーたちは、炊事の水をもとめて水源により近いところへ近づくだらう。水溜りに壘や罐の沈んでいるのをみれば、そういうところでない、美しい水の湧くところから直接に水を汲みたくなるだらう。そして石組をこわし、水を濁すことも起こるだらう。従って、土地の人がジュラルミンと有刺鉄線で水源を保護する必要が起こるだらう。それはそうである。それはそうと思いつながら私の心は落着かなかった。

杉や榎や櫟の、樹齢何百年のかもしれない堂々とした風姿にくらべて、この針金やジュラルミンはいかにも貧相であった。貧相であるばかりでなく、醜く、また軽薄であった。こういう貧しく、醜く、薄いことを、なぜしなければならぬのか。それを必要にさせる人間の所行が、醜く、軽薄で、心知らずだからではないのか。

かつて柳田国男翁の書いたものの中で読んだ記憶がある。昔の旅人たちは、泉を大切にし、清潔にし、後から来る旅人たちを快くここに憩わせようとする配慮をした。それが旅するものの道徳であるとともに慣習であった。泉のほとりに柳を植えたのも、村人の旅人への思いやりであった。その蔭で汗をぬぐい、ひといき入れて、次の脚を元気に踏み出していくための心遣いであった。

それは旅のエチケットであり、旅人同士の「ア」な配慮であった。——私の想像は、そこをもう一步超えて、もう少し以前のところへ飛んだ。水は人間にとって、最も「イ」な必要物である。①「イ」は必要物である。サバクの中のオアシスだけをいうのではない。豊葦原の瑞穂の国とみずからの国を呼びならわした、水の国の日本においても、水は基本的な条件であった。主食を米に仰ぐ日本人にとって、稲作の出来不出来は一年乃至両三年の運命に係る。稲は水を必要とする。良質の水を不断に得ることが、生活の基本条件であった。夏の旱魃期には水争いも起こるが、水源を確保すること、治水治山は国民共通の役目でもあった。

水に対する関心、水への尊敬の念は、日本の文化のひとつの特色をなしているように思う。水の豊かな国土は、同時に水害に見舞われ易い国土である。一方では水に感謝するとともに、他方では水を怖れた。そしてその感謝も畏怖も、直ちに国民の生活に根本的に関係していた。竜神の祭り、水天宮や天王の祭り、源実朝の「八大竜王雨やめ給へ」という祈念、雨乞いやてる坊主の行事、そういう祭りや行事はいたるところにある。

水は生活の基本条件であるが、同時に日本ではそれが文化や芸術の条件でもあった。水田の造営そのものが、一種の芸術的な営為でもあった。水路をつくり、畔を塗り、田の形をととのえる。段地での水田構築は石垣をつんだり、堤をつくらねばならぬ。土地に従って田の形を考えなければならぬ。早苗を植え、水を張った頃の水田の縞目が、やがて桂離宮の構想に関係しているとさえいった人もある。

山水という言葉が直ちに風景を意味するということは、日本人の自然観、風景観を物語ってもいるだろう。水墨画墨絵には水は殆どつきものといつてよい。舟を浮かべて糸を垂れて釣りする人を画いても、その舟は軽舟、人物の顔もしかとはわからないほどのテンケイにすぎない。②岩と水と、山と河と、それが画題のテーマである。庭あれば池あり、池あれば石組あり、それが庭というものの通念をなしている。そして庭園芸術は、最も庶民的な芸術であるとともに、世界に誇ってもいい高度の芸術性を帯びている。

*

私が昨日、泉の水源を囲うジュラルミンとトゲのついた針金をみてまず感じたのは、周囲の幽邃な風姿に対して、それらがいかにも不調和で醜いということであった。にもかかわらず今日それは必要であるが、それを必要にさせた原因は何かということであった。そして、そういうものを必要としない近代以前を想像し、水と人間、水と日本人のことに思い及んだ。

水道の蛇口をひねればいつでも水は出るものと思ひ込んでいる人間には、水に対する尊敬などはないだろう。渇水期に水の出がとほしくなったときにだけ、水のコウヨウに思い及ぶだろうが、そういう場合も、都の水道局や都政に対して不平をいうことぐらいだろう。即ち水も水道問題、水資源問題として、政治的問題また政治的対象になってきた。それは現代においてはやむをえないことだろう。やむをえないことと思ひながら、なお私は不満である。

現代はさまざまなものが機械化され、また政治化されている。そして人間はそれらのものを機械的、政治的に扱っている。それによって、さまざまな

疑似神聖なもののヴェールが剥がされ、正体が暴露され、大衆の批判によって正しい道に乗ったものも少なくなる。そういう点で「ウ」になることによつて公平になり、正しくなった部門も少なくはない。そういう点を認めながらも、なお泉と人間に関して私の感じた不満は去らない。

私の好きな寒山詩の中の一句は次のようなものである。「尋究無源水、源窮水不窮。」人は水源を尋ね求める。下流から遡つて、次第に上流にのぼる。そして遂に水源を探し出す。それは恰も科学の研究方法に似ている。結果から原因を探り、原因ではあるが決して結果にはならないところの、いわば第一原因、根本原因にまで遡るだろう。それが寒山の第一句、尋究無源水の具体的また人性的意味といつてよい。人性的と言つたのは、人は窮極原因を探し出すまでは不安だが、それを窮めつくせば安心してそこに腰をおろすという習性をもっているからである。人は原因不明の出来事に対しては不安であるが、これこれしかじかの原因によつてこの結果が起こつたということが判明すれば、そこで一安心する。科学の進歩とは原因解明の進歩といつてよい。例えば癌の発生原因はまだ不明であるから、癌は治りがたく、従つて人を不安にしている。癌の原因が判明すればチリヨウの方法も可能になる。その原因を探求することに現代医学は最大の努力を傾けながら、いまだにそこまで進歩していない。しかしいつの日かその原因は探し当てられるだろう。それもまた尋究無源水の一ケースである。

ところで、更に一層肝腎なのは、第二句の「源窮まりて、水窮まらず」である。水源は探究され、解明されたが、水は相変わらず滾々とわき出ているというのであろう。人跡未踏の昔からと同様に、水は湧き出ている。人に知られようが知られまいが、我関せずと日夜に湧き出て窮まるところがないというのである。科学はさまざまなことを解明し、進歩してきたが、山は高く、谷は低きこと、眼は横、鼻は直なることに変わりはない。その変わりのないところを窮めよと、禪はいうだろう。窮めつくして窮みなき辺際、しかも常住日夜、私たちの周辺にあるもの、いな、私そのものをこそ窮め来たれと、寒山はいうだろう。源窮水不窮、どこまでいっても水は水として湧き出てやまない。

泉は水不窮として、どこか神秘的である。科学の至りえない境として、どこか形而上的である。人は泉をそういうものとして感じてきた。理窟をいう人は、水源の水源、地下の水脈、水脈の発生理由、そういうものもいまや探究可能というかもしれない。それはそうだろう。然し地下千尺をくぐつて、ある岩と岩との間からたまたま地上に湧き出して日夜やまないという姿に、何の偶然性、不可思議をも感じないというのでは人間的に無感覚に過ぎる。

*

私は昨日、泉の傍らに立つて、ジュラルミンも有刺鉄線も必要のなかった時代のこと、人間のことを思った。樗や栂や杉の巨木を仰ぎ、滾々と流れてやまない水を見て、そういう時代に思いを馳せた。樹齢何百年の老樹がこの一角だけ未だに残されているのは、人がここを一種神聖な場所として感じてきたからであらう。水田を灌漑する水、また飲水を与えてくれる場所として感謝するとともに、もう一步、利害を超えたところで、源窮水不窮という姿に、一種の形而上的なもの、人力人智以上のものを感じたのであらう。そして、それを畏れ敬したのもあらう。神聖なる場所は穢してはならぬ。ソマツ

にしてはならぬ。みだりに立入ってはならぬ。そういうことを感じ、それを子や孫たちにも言い寄せたであろう。そしてこの泉の湧くところは、村人たちによって畏れられながら、保護され、保存されてきた。ときにここを穢す不埒なものがあれば、村人の制裁もうけたらう、所払いにもされたらう。私はいま「畏れ」という言葉を使った。私がおそれといったのは、ある偉大なるもの、人力や人智の及ばないものに対する畏敬の念である。このごろ「話し合い」という言葉が流行している。話せば解るという前提に立って「話し合う」ことによって、解らないこと、むずかしいことを処理しようとしている。それは一方ではよいことである。自分の意志や思慮分別を言葉によって表現できるようになったのは、格段の進歩である。同時に然し他方は、話し合いによって万事処理できるというような僭越を、無意識のうちに呼び起こしてきている。人智や人力で解決できないようなことはなにもないという傾向を呼び起こしてきている。従って、神聖なもの、人智以上のものであることを認めまいとする。従って、私のいう「おそれ」という感情、情緒も、急速に消失しようとしている。これはなかなか重要な問題を含んでいると私は思う。

美しい泉の湧くところ、樹齢何百年の老木の聳えるところ、昔の人のおそれたところへいって、ジュースの空罐、サイダーの壺を捨て、チョコレート銀紙を捨て、樹皮を削って我が名を刻み、等々という所行も、おそれの感情のないところからは当然に起きてくる。争って清い水を汲もうとして水源を荒すということも当然に出てくる。従って有刺鉄線で水源を囲む必要も当然に起こってくる。そして、それを特別に不思議とは思っていない。美しい草花がふみにじられ、若木が倒され、水溜りに空壺が沈むということも出てくる。それを防ごうとすれば、付近一帯に有刺鉄線をはりめぐらして立入禁止にしなくてはならないということになる。これは単に私が行った泉に限ったことではない。いたるところの觀光地、名山、景勝の地において同様である。

世間は右のような所行を往々にして公德心の欠如ということと説明しようとしている。公德心の欠如は、街頭でも、車中でも、集会場でも、人間の集まるところ至るところで見られることである。私がここで特に問題にしているのは、社会道徳や公德心という人間と人間との関係だけの問題ではなく、人間と人間を超えたものとの間の関係、また自分と自分以上のもとの間の関係についてである。もちろん、人は人に対して恐ろしいと感じたり、恐怖心をもったりする。私がおそれと区別して「畏れ」という文字を使ったのは、人間の人間に対する恐怖心とは違った「おそろし」という感情を、それに示したかったからである。社会道徳や公德心は、教育の仕方、テレビやラジオやジャナリズムなどを通しての躰の仕方によって、徐々にあるがよい方へ向かっているし、また向かいうるであろう。然し私のここで言っている「畏れ」の感情は、公德心の場合のように簡単ではない。というのは、近代という時代は、ここにいう「おそれ」をなくそうとする方向にすすんできたからである。近代化ということは、いわばおそれの感情、情緒を払拭することにほかならなかった。十七世紀のデカルト以来、人間理性の力を信じ、理性を正しく行使するならば、世に不可解なことはなにひとつない信じ、人智人力の無限の能力を信ずるという方向を辿って今日に到った。それが近代をして近代たらしめている根本的な特徴と云ってよい。従って人智人力以上のもの、形而上的なもの、神聖なものを、人智の未発達時代の遺物とするか、無用の長物とするか、または無視するか、そういう方向に進んで

きている。つまりは、エを不用のもの、無用のものとしてきたのである。それがヨーロッパの近代の特色であるが、ヨーロッパはその科学技術的先進性のために、世界の優位に立ち、ヨーロッパの近代が即ち世界の近代ということになった。日本の近代化は敗戦後においていよいよ促進されてきたのだから、おそれなどという感情が青少年の間から消え去っていったのもまた当然といえは当然であろう。

（唐木順三の文による『詩と死』より 改変した部分があります。）

※1 寒山詩：中国唐代の伝説的な僧寒山が作ったとされる詩。

※2 形而上的：時間・空間を超越して、感覚を通しては存在を知ることができないようす。

問一 ——— ①～⑤のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

問二 ——— ア～オの漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問三 ——— 1 「それはそうと思いつながら私の心は落着かなかつた」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 このような貧しく軽薄な行為をする土地の人々を残念に思ったから。
- 2 ハイカーたちがよりきれいな水を求めるのは自然なことだと思つたから。
- 3 人工物で遮るよりも人々の公德心を育てるほうが大事だと考えたから。
- 4 囲いの存在が周辺の美しい自然に調和しておらず、醜悪な感じがしたから。

問四 ——— 2 「それを必要にさせた原因は何か」とあるが、作者は人々の心にあるものが欠けていることが原因だと感じている。それは何か、最も適する表現を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 ——— 3 「泉と人間に関して私の感じた不満」とあるが、作者が不満を感じるのはなぜか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人間は泉を科学的な視点で見えてしまい、禅や寒山などの求めに答えられないから。
- 2 泉の源を探求した後も、人間は更に地下の水脈を探らなければならないから。
- 3 人間は泉に対して渇水期にしか関心を持たず、それも政治的にしか捉えていないから。
- 4 泉に関して、全てを探求し尽くすことは人間には不可能だと考えているから。

問六 —— 4 「人智や人力で解決できないようなことはなにもない」とあるが、このような傾向が生まれたのはなぜか。次の①、②の条件を満たした一文で書きなさい。

- ① 文末の「から。」という語句につながるように五十字以上六十字以内で書くこと。文末の「から。」は文字数に含めないこと。
- ② 「近代」「理性」という語を用いること。

問七

- ア く ウ に入れるのに最も適する言葉を次の中からそれぞれ選び、その番号を答えなさい。
- 1 絶対的
 - 2 民主的
 - 3 根本的
 - 4 表面的
 - 5 普遍的
 - 6 人間的

問八

エ に入れるのに最も適する表現を五字以上十字以内で考えて書きなさい。

